

1 研究目的、研究方法など

本研究計画調書は「小区分」の審査区分で審査されます。記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」（公募要領 1 9 頁参照）を参考にすること。

本研究の目的と方法などについて、4 頁以内で記述すること。

冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述し、本文には、(1)本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」、(2)本研究の目的および学術的独自性と創造性、(3)本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ、(4)本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか、(5)本研究の目的を達成するための準備状況、について具体的かつ明確に記述すること。

本研究を研究分担者とともに行う場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割を記述すること。

若手研究 or 基盤 C 用の申請書作成メモです

（概要）

申請書が完成したら、本文から以下の項目に対応する文章を抜き出してきて、10 ± 1 行になるようにまとめる。前半 2 項目と後半 2 項目で段落を分ける。

- 学術的背景 ... 数行
- 学術的「問い」 ... 1 文で端的に
- 研究目的と内容 ... 数行
- 研究が達成したときに期待されるインパクトや波及効果など ... 1 文で端的に

（本文）

(1) 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

★ 学術的背景

この項目は審査員がさくっと知りたいところなので、長々と書かない。いかに短い説明で、この研究分野が面白くて重要な分野だと思ってもらえるか工夫する。学術的背景の部分は図入りで 1 ページ目までか、長くても 2 ページ目の半分までに抑える。

- この節の前半に、申請する研究分野ですでに明らかになっていること、確立していることをまとめる
- 後半にはこの分野における自分の研究成果（出版発表済み）を紹介し、どのように分野に貢献してきたかまとめる
- 前半と後半を段落で分けるなどして、どこからが自分の研究に対する記述なのか明確にする
- 次の節で述べる『学術的「問い」』を理解するための最低限度の説明で十分である。審査員は勉強してその分野に詳しくなりたいわけではない。イントロが重要な学術論文と大きく異なる

★ 研究課題の核心をなす学術的「問い」

- 『学術的「問い」』とは、当該の研究分野において解決しなければならない課題のことである。学術的背景に続けて「しかしながら」で始めると書きやすい。
- なぜ問題になっているのか、どうして解決しなければならないのか、についても記述する。

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

(2) 本研究の目的および学術的独自性と創造性

★ 目的

- この研究を実施することによって何を解明したいのかを数行でまとめる。
- 研究目的は基本的には学術的「問い」を解決することだと思うので、前項と重複する内容を改めて書いてもよい。

★ 学術的独自性と創造性

以下の質問に答えていく感じで書けばよい。

学術的独自性

- この研究がなぜ重要だと言えるのか？
- どこにオリジナリティがあるのか？何がまだやられていないのか？
- この研究は申請者でないとできないのか？

最後の点については、申請者がこれまでに習得した専門知識や技術、独自に開発した実験装置やプログラム、使用予定の研究設備の特筆すべき性能などをアピールする。世の中には自分の上位互換など山ほどいるものだが、そういうのは別に気にしなくて良い。

創造性

- プロジェクトが終了したとき、その成果が当該研究分野にどのようなインパクトを与えるのか？どのような貢献ができるのか？
- 次にどのような展開が期待されるか？
- 他の研究分野、学術全般、あるいは社会に対してどのような影響(波及効果)があるか？

(3) 本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

★ 着想に至った経緯

- どうしてこの研究課題に取り組もうと思ったのか、どうやってこの課題にたどりついたのか、などをこれまでの個人的な研究活動の経験を踏まえて述べる

★ 関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

- この節の前半で、項目(1)で挙げた学術的「問い」の解決に取り組んでいる国内外の最近の研究を、引用文献を挙げて具体的に紹介する。関係するワークショップやシンポジウムがあったのなら、どういう議論が取り交わされたのかに触れるのもあり
- 後半で、申請課題の研究と他の人の先行研究を比較したときの相違点と優位性を述べる

ここまでで2ページ目をすべて埋めるか、多くても3ページ目の半分くらいまで

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

(4) 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

具体的な研究計画を記述する項目であり、申請書の中で一番重要。図を含めて1ページ以上を使う。

- 冒頭に全研究計画の概要と使用する方法を簡潔にまとめる
- 研究をいくつかのサブテーマに分ける。サブテーマごとにその目的や意義を記載する。サブテーマ内で個別の研究項目を列挙し、対象や手法、その結果明らかになることなどをできるだけ具体的かつ詳細に書く。ただし、研究期間の後半に実施する計画については計画の解像度がある程度落ちていっても問題ない。
- それぞれのサブテーマは独立に実施できるものにする。研究がうまく行かずに一つのサブテーマが破綻したときに、他のサブテーマに影響が及ばないようにする
- 「学術論文にまとめる」「学会で報告する」など当たり前のことは書かない
- 計画の分量が少なすぎると期待される成果が乏しいとして落とされるし、多すぎると達成できるか不安だとして落とされる。目安としては、申請期間に対して年平均2本の論文が出せる程度の計画を提案するのがちょうど良い気がする
- サブテーマ単位で、それぞれの研究をいつやるのか(研究計画の何年目にやるのか)わかるようにしておく
- 研究分担者がいる場合は、誰がどの研究を担当するのか明記する
- 研究計画の構造や分担状況がひと目でわかるような概略図をつくる。表でもよい

(5) 本研究の目的を達成するための準備状況

4ページ目の残りを使う。プロジェクトが進行中であることが伝われば十分なので、使うスペースは多くてもページの半分以下で事足りる

- 申請課題のプロジェクトが現在どの程度まで進んでいるか書く
- プロジェクトの一部としてすでに出版されている成果、プレプリント、査読中の論文、学会発表などすべて記入する
- プレリミナリな結果があることを図や写真で示す。何かしらの結果があることが伝われば十分で、審査員にその図の意味することを理解させる必要はない
- この項目があることからわかるように、手を付けていない研究テーマにはそもそも応募できないことに注意する

そのほか

- 各項目の説明には適宜模式図や概念図を挿入する。ただし他の人の論文や総説にある図をパクったりせずに自分で作ること。図中の文字は日本語にして、サイズは本文と同じくらいにすること。
- 項目(5)の準備状況でプレリミナリな結果を紹介するのを除いて、一瞥しただけで非専門家が意味を理解できないようなグラフなどは掲載しないこと。

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

- 見た目の問題として最終的な申請書は4ページ目の最後まですべて埋まっているべきである。図の表示サイズを変更して分量を調整する。
- 読む人の知識レベルとしては、研究室に入ってきたばかりの平均的な大学院生を想定すれば良い。
- 申請書は同僚や知り合いにも読んでもらって、客観的な視点から意見を求めると問題点が発覚しやすい。同じ分野の人でもよいが、研究分野の小区分や中区分が違う分野の人から意見がもらえるとさらによい。科研費の審査員経験がある人からのコメントは尚更良い。一読しただけではわかりづらい文章や、インパクトに欠ける点を指摘してもらおう。

2 応募者の研究遂行能力及び研究環境

応募者（研究代表者、研究分担者）の研究計画の実行可能性を示すため、(1)これまでの研究活動、(2)研究環境（研究遂行に必要な研究施設・設備・研究資料等を含む）について2頁以内で記述すること。

「(1)これまでの研究活動」の記述には、研究活動を中断していた期間がある場合にはその説明などを含めてもよい。

(1) これまでの研究活動

- 申請時点から過去5年間に得られた業績（学術論文、総説、著書、特許、招待講演）をすべて記載する。研究活動を中断していた期間がある場合はその期間を除いて5年分。ただし、申請書に入り切らなくなれば、申請課題と関係性の薄いものを省く
- 申請課題と密接に関係する業績はさらに遡って記載する。ただし古いのを記載しすぎると目新しさに欠けて印象が悪くなるので、重要なものに絞る
- 分担者がいる場合、その人の業績は申請課題と直接関係するものだけを記載する
- 申請者と分担者の名前に下線を引く。著者が大勢いて筆頭著者でない場合は【筆頭著者名、申請者の名前（人中×番目）、*et al.*】のように記載する
- 業績は研究トピックごとに節でまとめて（細切れにならないよう、一つのトピックはできるだけ大きくくる）、それぞれ冒頭にどんな研究をしてきたかを簡潔に書く。今回の申請課題で使う研究手法や知識を使っている業績はそれをアピールする
- 若手研究の場合は業績が少なくて空欄が出来てしまうことが多いので、業績リストを5年以上遡ったり、学会の一般講演も業績に入れたり、これまでの研究成果の説明を詳細にしたリ、論文で使った見栄えの良い図を入れるなどしてスペースを埋める
- 出版が受理されていない論文はここに記載不可。申請課題に関係する査読中論文があれば前ページの項目(5)準備状況の方に書く。招待講演の予定はここに書いてよい。
- 受賞歴や代表としての外部資金（科研費、民間助成）獲得歴もアピール材料になるので、あれば記載する
- いくら立派な研究計画を書いても、結局は業績がないと通らない。若手研究や基盤Cクラスなら分野の平均的なIFの雑誌に年2,3報（うち主著論文1報以上）を出してるくらいの業績はほしい

(2) 研究環境

- 申請課題の研究に使用できる研究施設や、研究設備の保有状況を具体的に書く
- 現状で足りていないものがあれば、その具体的な入手方法を書く
- 今の研究環境と科研費によるサポートで申請課題が十分達成できることをアピールする
- 現在の研究環境の窮状を訴えて科研費をめぐんでもらうための場ではない。ネガティブなことは絶対に書かない。
- 科研費は主導的な立場の研究者に与えられる資金なので「〇〇教授から助言をもらう」などとは間違っても書かない（もちろん、実際問題として研究に困ったときは助言をもらいに行くべきである）
- そんなに重要な項目でないので、10行程度かそれ以下で十分

【 2 応募者の研究遂行能力及び研究環境(つづき) 】

3 人権の保護及び法令等の遵守への対応 (公募要領4頁参照)

本研究を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など指針・法令等(国際共同研究を行う国・地域の指針・法令等を含む)に基づく手続が必要な研究が含まれている場合、講じる対策と措置を、1頁以内で記述すること。

個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査・行動調査(個人履歴・映像を含む)、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続が必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

該当しない場合には、その旨記述すること。

- ちゃんと学内の倫理委員や安全委員を通してるので、採択されても研究を実施できないなんてことにはなりませんよ、ということが審査委員に伝わればよい。評価に一切影響しない
- 該当しなければ「該当なし。」の一言でよい。

4 研究計画最終年度前年度応募を行う場合の記述事項 (該当者は必ず記述すること(公募要領27頁参照))

本研究の研究代表者が行っている、令和5(2023)年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ、本研究を前年度応募する理由(研究の展開状況、経費の必要性等)を1頁以内で記述すること。

該当しない場合は記述欄を削除することなく、空欄のまま提出すること。

研究種目名	課題番号	研究課題名	研究期間
			平成 年 度 ~ 令和 5 年度

当初研究計画及び研究成果

前年度応募する理由

- ほとんどの人は特に気にする必要がない項目
- 「来年が最終年度だけど、新しい展開があってこのままの予算配分額では研究が満足にできなくなるから改めて科研費を取り直す」「今の研究がうまく行っていて次は基盤Bのような額の大きい科研費を取って研究規模を大きくしたいけど、通すのは難しいし落ちたときに科研費が途切れるのが嫌だから、来年の研究費を保障しつつチャレンジしたい」みたいなシチュエーションで使う